

か有りあゝと思^ハハ^ル。

日^本の^前に、^{（この年の）} ^{（見入る）}とありまを。

くんないいものではありまを。と、チ

ッテンテン氏は、日考之深く言つん。日考之

いしそもこれに市場^{（出）}よりな物じやあり

まを。あの連中は、向岸時代^{（英國王ジョージ二世時代。国王が一六八}

九年佛國へ逃走した時、その管理員は「のいいぬを持つてい

ると言いましん。だが、テイレツトさん。く

ちあげて申せば、もしありま^{（出）}が^{（見入る）}とありま

ツツク

ツツク

このおび切りあいのわかれ、一瞬見拂いのヤ切手

をぼんと投げ出して、くだきまをトロー、そして、

お知、こゝろ一五品を識別する^{（書）}をもち、こゝ

ろ一五品をほおす。たけの信用^{（書）}をもつていふことを

知つてくだきまをトロー——そしておの^{（書）}まを

は、すぐさまあつていさ、あの品の前へおつ

れ、私は、もうこれ以上のことば

できませぬよ」と、申しあげ、^{（書）}あつていさ。と

「コヒヤヒヤ！」と、テイレウと氏は、拍手

代り、店の床板をステウキの端で、^{（書）}内田、けん

いた。『君は、そのために、お人よしのアメ

リカ人を、おれくさいはめと込んだおぬ？ え

の買手

?
と

『どういたします。おは、アメリカ人で

とどく人ども、買手におちやをうたことな

お高き

ありませんよ。おごらんを下さい。さうさ

されは

立つていきます。——もしおが、

この由素を、おぼくし知つていたか——と

ほの

『おは、おぼくし知れなす——と、

ほの

いこい

テイレウの氏は横領を入れた。

可は、は！ どうとも修見談をおつしやる

およろしい。いや、だが、おの申しこいよよ

うん、もしおのの受のこことを、けんのもを

こし知つていたら、この受は、おの要れし

ていゝ値段とよろじやないかです。——~~お~~よ

しんば誰か、この受を、どこかかどくまで

正真正銘のもんだと見ぬいたれしましよとも、

そしとまら、おの仲間の誰も、この受のこの

店にまで以来、~~お~~指一本触^ふわることさえ極^まい

られていたらしましよとも、ぬ。

第百一十号

「で、どうなんだい。二十五^{キニイ}では？」

第百一十号

「ソレの三倍^{なんら、ソレ上サ}を^{まうはよ。}七十五^{キニイ}」

第百一十号

無論、この二人の間^心に、値段の^{あゆみ}

字リはあつた。正確なところは、どうでもい

いことだが——約は、六十ギニイだつたと思

う。とにかくくくく、三十分^{シヨク}後には、

物^物は色々装きれ、一時間^ハもたつて、テイ

レットは^氏それを馬車へ抱え^ミ、立ちまわつて

しまつた。

チツテンデン氏は、^手切手を手にした

から、ニコニコして「ダイレット氏さ、戸口ま
 じと送つた。そして、おニコニコして、居間
 へ戻つた。そこでは妻君が茶の支度をしておい
 る。彼はドアのところで立ちどまつた。

「やれやれ、厄介掛いしなよ。」と、彼は言
 った。

「有り難いわ！ 且と、チツテンとドン夫人は、
 茶瓶を置きながら言つた。「ダイレットさん

は、よろしくでいかしつて？。」と

「うん、大よろこびさ。」と

曰ほぬの人より、ダイレツトまんたつち

ことだ、まだしもふあつたわ。

曰いや、どうだわ。あの人は思い男じや

ないわ。

曰そりやそかり知れないけど、あの人は、

ちよつとやさつとの事は驚くような人じやな

いあ。

曰うわ、か前のそう思うなら、わしも、あ

の人の自分で進んで、あれを思つたわと思

うよ。まあかんにもあしは、もうあれを

持もつつやをふまひ。まあまあ、あり

美うつくしいことさ。と

こゝろ、チツテンテン夫婦は、お茶を飲

んだ。

一方、テイレット氏と、その新らしい糖

り出でし物もの にはどんなことかあ 新あらたしい握にぎし出

し物が何かといふことは、この一篇の標しるし題だいで

わのつと頂あたまけだろ。そしてそれが、どん

なふの物だかといふ事こと ほんついで、

筆者はできるだけ詳しく、説明しやうめいしなけれはな

屋へ置こす。その大テーブルの上へ電燈を
たらし

それは、三葉草山に、三階の、通路を見お

ろす、ダイレットの血痕向へ運ばれた。包み

紙がほどけると、その前面がパウとあり

られた。一二時頃といふもの、ダイレット氏

は墓中で、人形屋敷の都府の^{の内幕の}呪い、詰め

物を抜き出した。

この^{白濁を始末} 事は終わった時、^{警察}ダイ

レット氏の^{手紙} 大さき^{れきたしやえ} 抽斗卓の上へ^を縛え

まづなものは、ストローベリー・イル・ゴシック

式に作られた人形屋敷 ^{標型の} 豪華な装飾として、

これ以上完全で、これ以上興味あるものは、

見つけることが困難だといつていいほどの

ものだ。それ ^か 今や、三つの丈高い硝子窓

を斜めに入射し入る夕日 ^に 輝いてゐる ^の 光

だ。

それは ^幅 六呎たつぷりで、正面左側の礼拝

堂、右側の殿についていた。屋敷の主要部分

は、前記の言つたようなゴシック様式で、窓 ^に

はみま夫つねアーチいさよつ ~~きり~~こおり、
寺のたて

に切り込んた つみあま 大空穴の天蓋は見え受け入れよ
上からは

くま、唐草と鬼板飾の ~~きり~~ついた、
妙蓮骨の

帳がふさつていた。角々かどには、
アーチ形の

格ふだらけの、おかしな いさ 槽があつた。
礼拝堂

には山さな夫塔や控壁のあり、
槽の中へは鐘

がかけられ、どの位高も色硝子の
はめこんであ

つた。正面をひろくと四つの大きな
部屋が見

えた。 いさ 寢室と食堂と客間と
基壇で、どれも

それそれしつくりした家具が、
まうたく完全

その状態で備えつけられていた。

右側の厨●は、二段をなつていて、その内

は、馬具や鞍馬車や馬丁が入れられてあり、また

柱時計がかけられ、時鐘はゴシック式の圓天

井がつけられていた。

この屋敷の装飾については、建築雑誌の巻末に

載せられてあるが、その中から、建築雑誌の巻末に

山のフライ鍋、どんぶり、澤山の金、澤山の橋

子、そのほかの縁の窓などか、絨織などか、シヤ


ンテリヤなどか、フォア・ホスタ、人食卓上布
四柱、床、其などか、人食卓上布

トップ、^(皿鉢) 蓋の備えがなされてい

かいついては、無論、紙敷を費し書くべき

を要するのだ、それはすべて読者の想

像^かのせしよ。ただ言つて置きたのは、

屋敷の基底すなわち柱脚 

（この柱脚は正面のドア及び半分摺のつ

いてい）テラスへの踏み段 ^{かきつ} 或は深さ、

しつかり合ふようになつてい

は、^い 抽斗 ^い がついで ^下 ことである。この抽斗

は、きれいなほなされてゆく刺繍のカーテ

ニヤ、屋敷の中の人形の衣類の着替を^え変換する

^や約言すれば、この屋敷は変換を^{おもしろくたのしみ}受ける

え、修理を加えるための、^{材料品が}制限がない

入れてあつたのだつた。

曰ホレーヌ・ウオルポール ^{一七〇〇年代の英國の小説家}

ストロベリー・ヒルは^精骨とは^{これ}異なる。ウオ

ルポール はきつと、^{ちんちん}屋敷をつくる

としん^{きん}んちんいさい。山——これが、この

人形屋敷の前で、^{恭々しく}腰まが

きなのりの、テイレット氏の回顧的なつぶや

きだつた。 （た） 何 （た） 俾 （た） たるかよ、今日のおひ日

よ （た） ~~ま~~ （た） まさ （た） によき日よだ！ 今日朝あしは、

（た） ~~ま~~ （た） ~~ま~~ （た） 形屋敷の （た） ~~ま~~ （た） ~~ま~~ （た） を求め、たぬには、

五百磅もいえども苦れいよいつもりでいん

たぬ、それがなると、 （た） ~~ま~~ （た） ~~ま~~ （た） たいたか市 （た） ~~ま~~ （た） ~~ま~~ （た） 價の十

令の一で、あしの手にくろひりこんだのだ。

よしよし！ たぬ （た） ~~ま~~ （た） ~~ま~~ （た） と、 （た） ~~ま~~ （た） ~~ま~~ （た） 幸運に逆

のことが起りそとで心配いもなう。 （た） ~~ま~~ （た） ~~ま~~ （た） あり、 （た） ~~ま~~ （た） ~~ま~~ （た） な

の●んか後居の人形さん達を目とてみよ。 （た） ~~ま~~ （た） ~~ま~~ （た） 。

そこでテイルット皮は、 （た） ~~ま~~ （た） ~~ま~~ （た） 人形を一列になら

べた。 ~~あつた~~ まんこで、

~~あつた~~ 誰か 人形の衣

常衣目録をつくりあげて伊勢に入れなければな

ら ~~あつた~~ わけだが、 ~~あつた~~ はそれはできな

い。

そこは一人の紳士人形と淑女人形があつた。

それと青い綿子と文織の服をつけてつた。

そこには男の子と女の子の人形があつた。料

理人、~~あつた~~ ^(下四カ) 人形もあり、 ~~あつた~~ ^(既) 丁や二人

の ~~あつた~~ ^(馬) や ~~あつた~~ ^(又) 二人の馬丁の人形もあつ

た。

可憐な女がいておなな？　うむ、まじかいて
のようだよ。

寢室の フオア・ポムラア 四柱寢室のカーテンは、四方と

もしつくり引きますよとわかってたので、ティレ

ット氏は、指をカーテンの中へ差し入れてみ

た。たしめんベッドは感じられた。ところが

紐は急いで指をひっこめた。とりうのは、ベッ

ドを押さえる時、どうやら、やはりお嬢をぐあい

に生かすらしいもの——動いた わけ ではないな、

他方そう認めていらぬもの——があるよと聞

われわれもだつた。オレはカーテンを引き

のけた。白髪の老翁紳士の人形が、長いリ

ンネルの寝間着とナイト・キャップをつけて、

ベッドにぬくろんでしるのを引つ張り出した。

くくで話は一段落だった。

夕食の時間も近かったので、五分ばかり、カイン、レイレット氏

は、淑女や子供達を客間へ、紳士を食堂

へ、下男達を其まのや殿へ、老人をベッドへ

戻した。それからつぎの朝化粧部屋へ行つ

た。——で、読者も筆者も、夜の十一時頃ま

では、もし彼を見かけることも聞くこともな
いのである。

テイレット氏は、氣まぐれ ~~書~~、自 ~~の~~ ^慢 蒐

集ぬにとりまわられて眠る癖があつた。今彼が

現われぬ大きな部屋には、ベッドが備えつけ

てあつた。 ^{その部屋は} 浴槽や、衣裳室や、いろん

な設備品の置かれて、便利な部屋の様

なつた。彼の ^{フアア・ホスピア} 四柱寢室は、高價な ~~寝具~~ 貴重

品だつた。それは ^広 羨 ^く、彼は ^の ~~書~~ ^で 書

きものさし ^時 たり、坐り ^で ~~寝~~ ^{客を} ~~待~~ ^迎

ま、息を吞んでいたか、それだけではあさま
らげ、ほんととく^豊にベッドの中じ起きあがっ
た。

その部屋には、全然^{あり}燈火はあつたのだが、

^{ひきだしすてん}抽斗櫃の上の人形屋敷は、クツキリとほきあ

がつて見えた。どうしてそく見えただのか、朝

にやうきまを、彼は自問しようとはしなかつた。

だが、それはまさしくそく見えただのなつた。

^{この}この事實は、輝やかな秋の月が、一^{大ま}國の白

い石造建築の前面を隈なく照らした場合、そ

のかがつん

れが四合の「埋」の後方にあるとも、あふゆ

る部分が雪蓋のような鋭敏さで見る^{のと}る

と同じだったん。——人形屋敷のぐるりには

樹があり、ま^ら礼^堂や^{屋敷}の^りろにも

樹が^はり^ていた。テイレツト氏は、涼しく静

かな九月の夜の白いを感じ^るよう^に思っ^たん。

彼は、ちん^なか、^い馬^が動^くよう^に、折

々の足踏み^の音、ガチャガチャい^る音を聞

いたよう^に思っ^た。そして^{屋敷}の上方へ眼を

やると、^{自分の部屋の時}見

日お前達は、あしは、まにわ見せよと言

く人たを止と、彼は舞臺ひとりつぶやいた。そ

して懸念なり、煙火のついた心を凝視した。窓

には窓生活 どは、鏡戸をしめられ

カーテを引られたりしなれば、あつた

かと、彼は考へん。 部屋、

い どんまこ 燈籠とが行われたか — 彼の親 窓を

さまたげ、ものは、べつな

二つの部屋は、煙火のともつた。一つは一階

でドアの右手にあつた部屋、一つは 左手の

二階の部屋——前のハツとあめよく、あと

のはやや晴れた。下の部屋は食堂だった。

^{食卓}が一つ置かれていた、食事はとろ

すんで、お茶をのむ、^{おつかいの}コップが、残されて

いた。青儒子の男と紋織の^{おんな}が部屋にい

た。二人は食卓に^{おんな}をびつたりたたくので

さつき、^{おんな}話してゐた。おろろり

を^{おんな}話とやめ、^{おんな}を

一度甲は立ちあがりて窓をみりき、首を

き出して、^{おんな}可い手をあてた。食器棚には銀の

燭臺があつて蝋燭がともしつてゐた。男は窓の

いはなれぬが、そのまま部屋を出て行くよ

い見えた。女は蝋燭を手にして、そお立つ

たあま耳を澄ましてゐた。彼女が善満の顔に

は、彼女毒にのしかかり倒れる、毒の恐怖の耐

えよと、懸命に努力してゐるよるを表情が

あつた。憎思ひみぢた、無作法無作法が、平ッ平ッ

^{たい}、~~あ~~、~~さ~~、~~る~~、~~そ~~、~~う~~、~~な~~、~~顔~~、~~だ~~、~~つ~~、~~た~~。そくへ男が戻つて

来た。女は紙あふまれの小さな物を受取り、

さむいで出て行つた。~~男~~男がけんの一二分

別行一字ササ

その指を左を右に左にうごかし、掛蒲団の上

ヒールの

で調子をとらえていた、
寝巻のむこうのドア

あの階下の

のあった。天井の燈火が映つて、女がけいつ

て来た。彼女はテーブルの瓶燭を置き、爐を

へ行つて乳母を揺り起した。彼女の手には、

栓をぬいた

古めかしい酒瓶が、にぎやかでつた。乳母は

それを空取つて、小さな銀のソース鍋はいく

つかをほぎ入れ、テーブルの上の薬味をまじ

り量の香味と砂糖を加え、火にのせた。この

寝巻の

向ひ、老人は、よあやあしげに女を手招きし

た。漱髪はほろみずの匂い使女は老人のそばへ
かき、脈でもみるよりの老婦手首をとつた。

そゝといかんとびつくりしたよりの、
咬自分の

んだ。老人は、心配を~~し~~に使女を見やつた。

それゆゑ空の音を指さし、ちやんとか言つた。

女はうそぢいん。そゝと階下の男がしたよ

うことをした。——窓扉をあけ、
芝居

と歌たつぷりな唇をすまうた。それゆゑ首を

つこめ、ため息ついでにうよりの見ゆる。老人

へ眼をやつ々、首を振つた。

この時、火の上のポジット「熱い牛乳に葡萄汁」
などを加えた飲料

は噴き出した。祖母はそれを二つの手

のついた巾着に銀鉢にそそぎ、

のそばへ持って来た。老人は嫌がるように

おろし、手を振って去る。たし

めし、女と祖母はともども老人へのおめかし

んだ。あきらみぬそれと老人は無理じい

いよのだった。老人は老人を抱え

したので、老人もしめななく、銀鉢を口にあ

てた。ゴクンゴクンと、ほとんど全部飲

みほしたので、女と乳母は老人を寝かしこめ
 った。女は微笑とともん「おやすみなさい」
 と言つて、部屋を立ち去つた。鉢と瓶と銀の
 ソース鍋も持つて行つてしまつた。乳母はま
 た膝掛椅子へ坐まつた。しばらくはシーンと
 静まり度かえつた。

突然、老人は寝蓆^の中^でで跳ね起^る

た。—— 聲はなにか叫んだにちないやうなつた。

といふのは、乳母も椅子から跳ね起^る

ひと飛んで山姥さまのそばへ行つたので

る。老人は悲~~し~~し、恐ろしげな^{様子}を~~見~~てい

た——顔は蒼蒼言はとんど黒がひくさいに光

血し、^{しいい}両眼は~~赤~~赤^くなり、両手で胸をつか

み、唇には泡を^吹いた。

一瞬、祖母は老人をほっこおいて、ドアへ

走り、^{バタンと}^{実音}扉をあけた。そして^{「誰のま}あそび

てしと高く叫んだらしかった。夢^{すか}を~~見~~た^寝其土

へ^{追え}痛む~~夢~~なり、夢中で老人を介抱~~夢~~——寝

めしなり、そのほのそ^{すか}で^{すか}——^ように^見え

た。^夢女とその夫と五六人の下男が、^怖気^{おそ}立つ

かつた。彼は戸口で、男とその妻夫人の迎え
られた。夫人は両手でハンカチを握り締め、

男は悲劇的を顔をしてゐたが、自制心は持ち

續けてゐた。二人はこの訪来客を食堂へ案内

した。そこで客はテーブルの上へ書類の函を

置き、二人へ振り向いて、その

驚きの面もちで聞き入った。彼はあまなちを

うなずいた。軽く両手を投げ出した。それは、

今夜は泊つて休息して貰ふがと

勧めを断つてゐるよと見えた。そして二

と分と大々ぬぐち、彼は静かに階級を降り、

馬車~~を~~を駈つて去つてしまつた。青縹

子の男は、階級の上から彼を見送つたが、陰

険な微笑^のを返さず、彼の肥つた蒼白い顔

のあざをみえた。馬車の火が見えなくなると、

あきらはずつかり暗く暮つた。

だが、テイレット氏は、ベッドに起きあが

つたままむしん。彼は当然そんな、この続き

がある^{心算} ~~と~~と考へた。^{人形} 屋敷の正面は、ま

しはらく微笑を返つた。だが、うんどう事は着

柱廊

別行一宇サタ

ちがってしつとところがあつた。煙火はほろの

窓にとし ^{つち} ~~つち~~ 一つは層敷のてつぺんに、

他のものは神拜堂のまぐら ~~まぐら~~ 色硝子の窓

~~まぐら~~ 輝やみした。これの窓越し ~~は~~ は、十分

はつきりは見えなかつた、煙は見えなかつた。

部屋の中は、この建物の他の部分と同じく、

用意周到に ^{はがし} 飾りまきまき ~~まきまき~~ した。デスクの

上りはこまやかな赤いクッションもあり、ゴシック

スタイル・キャビネット ^{キャビネット} 式の儒座天蓋もあり、西歐的な ~~装飾~~ ^{装飾} 全

装飾のついで尖塔型のオルガンもあり、黒白

漸行一字サケ

ダイレット氏が、あわてて不審立てした以

上は不審立てしないうで、屋敷のてっぺんの、

燈火あかりのついでに、窓のぞいてを見るのいい。そこには、

男の子と女の子が、二つの輪トラツクル・ベッド附床其まにねころ

んでいた。そと乳母の四柱フォア・ポスター床其まが、それよ

り高く進みこんだ。乳母はその時は見えなかつ

た。お多子おたご子どもの父と母が、そとへいって、

今喪服を着てつゝとろたつた。だが、その

態度の動作しぐさには、いつと悲しみの徴候しるしはな

かつた。たしめん彼等は、すこぶる元氣よく

笑い話をしていた。時は夫婦同士で、時は

は子ども[●]のどつちの一言を投げ、その答

ですぐ笑った。それから又は、ドアのそばの

釘をぬいてある^く白い^{カーペット}長上衣をとって来ようと

まわらぬら、爪立てして却屋外出て行くら

しのかつた。彼は^{自分の}しろいドアを^ぬめた。

一合の二合もたつて、ドアは~~き~~そろそろ

と聞いた。か^白か^色で~~き~~た首が、ドアのあ

たりを^{すよりのそきこん}探~~ま~~た。これはのあ、い、腰のま

わつた或^い女が、輪^わ宿^{しゆく}其^{その}主^{ぬし}のほへあゆみ寄

前作一字サケ

った。突然、立ちどまったかと思ふと、両手

をあげて、

（つぎ）
（おどろき）
正屈（まが）をあらわ

した。それは笑つていゝ又だった。子ども達

は多脚おびえきつていった。男の子はあなまの

うき世をみつかり、女の子はベッドから飛

び出ると、母の腕（うで）へ身を投げ（な）りつた。

すぐ親（おや）は子ども達をなぐさめた。膝（ひざ）に腰

かけさせ、頭（かぶ）をなで、白い長上着（ながじゆき）をつまみあ

げて、これをかぶつたのだよ、きんでもない

ことだよといふよふに、指（ゆび）おしたりした。そ

しとあしまいい子どりを抱えて寝かすに置き、

廊下をよりの手を振って、部屋から出て行つ

た。入れ代りぬ乳母がはいって来た。そして

向もなく部屋の燈火は消された。

まゆディレット氏は、身うごき一つもない

で、ほ視^{まぶつ}を^{まぶつ}見た。

新たな光——ランプでも蝋燭でもない——蒼

^{まぶつ}を^{まぶつ}見た

おめえ^{まぶつ}を^{まぶつ}見たが、部屋^{まぶつ}の背後の^{まぶつ}扉枠

嫌な

部屋へ

のふりを漏れて、ぼんやり射しこんで来

た。ギ、ギ、ギイト、ドアはまじく固きはしめ

天。

目撃者 目撃者 者は、いまこの部屋へはいって来た

のを、静くおしく説明する気にはなるとい。そ

れは、（多分） 望みすこしばかり自髪が残っている——

人のかたちの——（蛙） だとしても描出され得るよ

う。それは輪印寢具主のあたりを、長い間では

なかつたの、しきりいごめきまつた。叫


び聲 （多分） あるいはさきまをさかへはるか遠い地方

のふ （多分） まるよくなかすのな——だが、ま

さい、底知れぬ凄まじい叫び聲が、耳にひび

いた。とつと暗い人影が、階段を降りて来た。

先頭  の人影  、ちつきを棺を  運 

 だった。こゝろと説明をもつ人影の列は、

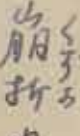
彼等の向に棺を肩ひして、響しずしと左

手の  ほうへ  進  ました。

夜の  時間  幾時間か経過した——決してゆ

つくり経過したのではな——と、テイレウ。

ト氏は考えた。が、だんだん彼は坐れ耐えら

れなくなつて、ベッドに  崩折れた——でも、

眼は閉ぢなつた。そして翌朝早く、彼は送

チツテンテン氏は、出くおした時、いきま

かテイレット氏へ、まともな顔が向けられま


いよりだつた。それは理由のないことではな

かつたのだ。——彼は言つた。

「はあ、私はあんなに、まじか度臆を抜か
どきどき

れをすつたれちぬいさうと思ひますよ。ね、

テイレットさん。
何をでかつて？、ええ、

そくく ~~ね~~ ところ申しあげてもいい  あんなは私

や病気の
家内が、商賣上やつこのけたことを、承知

しといつたりやりなつかも、たしかに、恐ろ

度腹を扱われをすつたんだ——とね。ですか、

テイレットさん。
~~新~~判断はあなたにおま

かせしきつよ。二つに一つの判断をね。二つ

一つと~~は~~は、~~新~~私か一方ではあん

を可愛らしい逸話を、くつちやつて廢物にし

なきヤクソ人のか、それとも、お容れね、~~私~~私

はあやうたにせ筋の立つた、活人画式の宮廷劇を

——午前一時は必らずお開演と番組をつくつ

た、
の事には買ひこんでるまゝ
生きた
おかしな~~新~~判断の宮廷劇を——

賣つてさしあげまうかと、申してよろしい~~の~~の

ぬの二つに一つなうんできあ。ねえ、おっしや

うととはござんすまい。なんですか？ あい

れを私の店にお返えしなさんですつて？ ふ

む、あなたはどうお考えですか？ いい条件を いや、しか

し私の考えを申しあげましよう。私がおれの

なめん拂った十^三万円を別にして、あなたにお金

をお返えしつたしましよ。それでいいでし

よ。と。

その日おつとおそく、ホテルで「いぶり部

屋」と、あてつけがまじく呼ばれていゝ喫煙

室で、二人はしばらく、ガツガツと話をつず
けた。

曰あれいついて、ほんところ、君ほど
れくさいのくことを知つていさうのぬ？
あれ

はどこから~~出~~出たのぬ？

曰正直に申して、私はその家を知らないの

ですよ、テイレットさん。勿論あれは出る田

舎家の物置から出た——とは、誰れでも見当

はつきりなさぬ。だが、~~お話をきく~~お話をきく限り

では、あれはこゝから百哩とははなれていな

抜き出した一枚の

一つ気になつてゐる人があつたよ。あんなは

あの人形屋敷の心劇を、すつかりごらんた

つたでしようか、あの、おしまいに馬車で乗

りつけて来る。都さん人形ね。あれをあなた

は、お医者さんだと思ひですか？ 私の家

内もそう思つてゐるんです。だが、私は、あ

れは詩人だと言ひ張つてゐるんです。たつ

と、あの又郎さんは書類を~~取~~持つていたでし

よ。そして~~書~~紙はちいさく~~な~~たなみえんで

あつたでしよう？

曰く、~~遺言~~遺言成た。と、テイレット氏は言っ

た。曰わしれよく考えてみて、^のあは寤其主

ねていん老人 ~~遺言~~遺言状たと結論しんのだ

よ。署名するためのぬ。と

曰く、つたり ~~遺言~~遺言の通り。と、チツテン

デン氏は言つた。曰で、私は、あの遺言状

は、若夫婦を除外 ^よしたもつたと思ふの

は、^{つたく}まか、どうですか？ まあ ^{つたく}あま ^{つたく}あま！ 私はい

い教訓です。私はもう二度と人形屋敷ク

て買ひませぬよ。ま、^{この上}給をぬい金をあけ

を奪んで、まっぴらで。——その毒殺され

たお祖^い父さんの事件を目撃し、もし私の自己

といふものを知ること、無用な^{蒐集}蒐集をなして、

断じてしよとは思いません。生きよ、而し

て生きべからしめよ！ ^{生涯の}これが今では私のモ

ットオである。上乗のモットオである。

ころしん ^{ふん}昂然たる感情に ^{ふん}ふん、チウテン

テン氏は、彼の部屋へ帰って行つた。

おさ日、テイレット氏は、この土地の地方学

会を訪ねた。心を奪われていゝあの不可思議

解く、なにかの手かのりを見つけたと

念じてのろとだった。彼はカンタベリー及び

ヨーク協会の発行の、
^{高主帳} ~~高主帳~~ 教区

の大きな目録を熟読したが失語してし

まった。彼が階級や廊下には、
^{いふん} ~~いふん~~ 版

~~画~~ かいっぱい ^{けら} ~~けら~~ のため、その

中 ^{うま} ~~うま~~ と ^{うま} ~~うま~~ の夢 ^{うま} ~~うま~~ 魔の家の類似した

のはな ^情 ~~情~~ 気 ^{うま} ~~うま~~ てしまった ^{うま} ~~うま~~ もの、

彼は最後に、人から見向きもされないう

を一室にはいった。埃だらけの硝子の箱の中

彼は其の帳を調べたが、

コクサム教区の時計の修理のたとい

うことを命じた。コクサム ~~教区~~ は、彼が教

区其の帳の目録を用を通した時、たまたま ~~記帳~~

と ~~い~~ どもた ~~た~~ 教区の名であった ~~と~~ ~~い~~ 向とな

く、 ~~彼~~ ~~の~~ ~~帳~~ ~~を~~ ~~見~~ ~~た~~ ~~が~~、その中から、ロージヤー・ミ

ルフオード、一七五七年九月十一日没、古年

七十六歳、といふ ~~過~~ 考帳を見つけた。

~~その~~ ~~帳~~ ~~の~~ ~~中~~ ~~に~~ ~~一~~ ~~の~~ ~~レ~~ ~~フ~~ ~~オ~~ ~~ー~~ ~~ド~~

~~の~~ ~~帳~~ ~~を~~ ~~見~~ ~~た~~ ~~が~~、ロージヤー・メレウエサー ~~古~~ ~~年~~ ~~七~~ ~~十~~ ~~六~~ ~~歳~~

九歳、 ~~エ~~ ~~リ~~ ~~ザ~~ ~~ベ~~ ~~古~~ ~~年~~ ~~七~~ ~~歳~~ が、同年同月の

ス・メレウエサー

十九日に没している ~~と~~ ~~い~~ ~~ふ~~ ~~記~~ ~~事~~ ~~を~~ ~~見~~ ~~た~~ ~~が~~、

あてにもかわいさしいものなんだから、この手が

かりは追いかきすぎるとも思えた。そこで

で午後、仲はコクサムへ馬車を駆った。コク

サム教会の北側の東端が、ミルフオード礼堂の

拝堂で、その北側の壁には、同家の人々の銘板タレット

がはめこまわっていた。ロージャーといふ老人

は、族長として地方長官として、まゝ人間と

して、^{その}徳能徳能は他をぬきんでて

よりの思われ。まゝこの老人の記念碑があった。

老人を愛する人エリサベスといふ娘が

疎虞したりしとせんか、恐らくは英國のグイ

トルグイウス「紀元前一世紀頃の四匹馬の建つ家」の名

を言願^のち得しなりんとは、斯道に據威あり、鑑

識家の言^{口を揃えて}うところなり。されど彼^は

愛する^{妻なる}女をいといけり、^子子を、突如と

て失いたるにより心^挫け、その青春^は

に在るまで、僻遠^の地をわたり、

輪奐のともをつくる^一閉却を建てて候めよと

りき。——^を謝^に後継者。

なる我は、^の卓技

その技能に對し、教へてゐるのや無文を擇び、表

心算を及ぶる哀悼を表すものなり。レ

子ども達のころと、ごく簡單に直境をい

つた。二人とも九月十二日の夜死んだと記さ

れてつた。

ディレツト氏は、このイルブリウジ家の事

^{まゝ} ~~まゝ~~ ^の ~~の~~ ^中 ~~中 ^に ~~に~~ たゞめんあの人形屋敷の悲劇の ^{場面が} ~~場面が~~ ^{裏面} ~~裏面~~~~

あつたと思つた。後はずい、素直な版画

らしい、五六の寫眞画集の中で、自分の考え

が正しいと信ずるに足る證據を見つけた。た

旅行ノ事

歸るといふことと物語つていた。

~~電車~~馬車を駆つて去らうとせん時、^{村の}金

堂の時計は四時をうつた。ダイレット氏は、

はじめて向つたのでもなりの、びくつと頭

をもちげ、^手両手で~~頭~~耳を、びしやりとふ

さいた。

——いま、~~人~~人形屋敷は、ダイレット氏

が、~~海~~海岸へ出發した暮日、召使のこ

リンズ、^{の手で}このぬいに荷造り^{きれ}殿のニ階裏

へ運ばうそれなままになつてゐる。そして、大

西洋の總方〔リカ〕^アの寄贈申込みを待てい
るのである。